

地域に根ざした仕事の工夫にふれ、将来をより創造的に思い描く

那賀高校（徳島・県立）

取材・文／松井大助



左から、みらい創造部（総合的な探究の時間やDX、地域みらい留学などを推進）の部長の繁田大地先生、「特殊伐採隊丸山組 組長」の呼称でも親しまれている丸山 稔先生

ステレオタイプではない
多様な働き方を知るために

森林が95%を占める徳島県那賀町。那賀高校はその町にある、森林クリエイト科と普通科からなる学校だ。

2016年に創設された森林クリエイト科には3つのコースがあり、伐倒や伐採をする「林業実践」、木材等の商品開発をする「地域資源」、木材加工や商品販売に挑む「木材加工」のいずれかを専攻する。木を切り、活用方法を考え、加工して販売するという産業の流れに沿うもので、同校の丸山 稔先生は「仕事の実践そのものを授業に組み込んだもの」と語る。

しかもその活動で、林業関連の地元事業者や町・県・国の職員とも協働するという。例えば、住宅地の育ちすぎた樹木が自重で折れたり電線にかかったりしないよう伐採するのを、ブロの管理の下で生徒が手伝う。さらに生徒が伐倒した樹木を使って、木工会社や木材チップ製造会社、製紙会社と協力し、木製の文具や遊具の商品開発にも挑む。また、校内の製材所に技術者を招き、あるいは事業者の設備を借りて、木工製品か

ら、町の施設で使う看板やベンチまで製作する。そして全国のお店や地元のマルシェ、ネット通販サイトでの販売も。こうした実践的な学びを、各専攻の生徒が連携しながら行っているのだ。

一方の普通科も地場産業と組んだ教育活動を展開。2024年度からは探究活動やインターンシップをより地域密着で進めている。その理由を、繁田大地先生は次のように述懐する。

「生徒の頭の中にある『職業』といえば、飲食店や販売店の店員、研究所や工場で働く人、美容師など、身近に接点があるものやメディアでよく見るものがほとんどで、その枠内だけで進路を考えている生徒もいたのです。地域の中には、既存の枠を超えた働き方をしている人がいます。那賀町にも、捕獲した鹿や猪を調理・販売するジビエ料理の専門家や、標高1300mの山奥で宿を経営する方、乗馬やホースセラピーを手がける方などがいるんです。

生徒が今ある知識だけでインターン先や進路を選ぶのではなく、地域の中に入って知らなかったことを体験し、『仕事ってもっと自由で、いろいろな働き方があるんだ』と感じながら進路を模索

したほうが、未来の可能性が広がるのではないかと考えました」

できることや挑みたい問題を
実体験から生徒が発見する

学んでいる生徒たちの意識は、特に入学当初は、千差万別だ。「林業を継ぎたい」「地域の中で学びたい」と、高いモチベーションをもった生徒がいる。一方で、勉強が得意ではなかったり、不登校を経験したりして、「この学校なら入れるから」と消極的な理由で門をくぐった生徒もいる。

しかし、不本意な思いを抱えた生徒でも、「学校の外にまで出て学ぶと、できること、やりたいことを見つけて、どんどん伸びます」と丸山先生は言う。今までの生徒の成長を懐かしむような笑顔で、そうした変化を生むと思われる要因も語ってくれた。

「一つは、林業や農業を通して自然を相手にする楽しさを実感すること。二つ目は、実践的な活動を大人と一緒にやるなかで『こんな仕事があるんだ』『こういう考えがあるんだ』と身をもって学べること。三つ目は、自分のしたことで周囲から認められたり喜んでもら

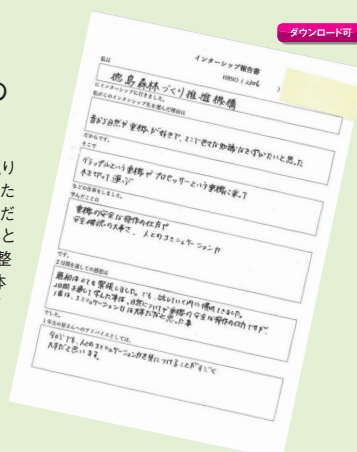
インターンシップの
振り返り

インターンシップの振り返りでは、どのような仕事をしたのか、そのなかで何を学んだか、どんなことを感じたか、といったことを言葉にして整理する。また、次年度に体験する1年生に向けたアドバイスも考える。

えたりすることです」

野球部があるからという理由で入学した生徒が、次第に林業実践にのめりこみ、成果を発表する全国大会で文部科学大臣賞を受賞。大学に進学し、林業の後継者を育てる教員を目指すようになったこともあった。仲良し3人組が「僕らで林業の会社を興す」と言い出し、皆でより高度なことが学べる専門の学校に進学したこともあった。

「その3人は、出前授業やインターンシップで、大手から独立した30代の林業経営者と関わったのが良かったのだと





普通科の活動。野生動物によるジビエ料理を手がける会社や、地元の農作物による郷土食を製造販売する有志団体、那賀町から「木育」を発信する山のおもちゃ美術館などを訪問。



森林クリエイト科の活動。山の中での木の伐採、森林調査のためのドローン操作、木材を使った商品の開発や製作など、林業やその関連産業の仕事につながることを実践の中で学ぶ。



地域探究同好会やエシカルクラブなどの部活動でも、放置ゆずの収穫、環境配慮の消費を促すマルシェでの販売など、地域の未来を見すえた活動に取り組む。



／ 生徒インタビュー ／

コミュニケーションを取りながら 自然との共存を考えたい



授業やインターンシップで、林業の現場にふれてきました。そのなかで、この仕事は自然と向き合うだけでなく、人と話し合っていくものであることを知りました。例えば「間伐による土砂崩れを起こさないよう、どの木を切ってどの木を残せばいいか」で意見を交わしたりするんです。もともと自分はコミュニケーションを取るのがそこまで得意じゃないと思っているのですが…ただ、自然との共存のために切磋琢磨するようにコミュニケーションを取るの、やってみたら得意でした。
(森林クリエイト科2年生・森本天海さん)

楽しいことを一緒に創るうちに 自分も地元で挑戦したくなった



地域探究同好会という部活動で、地域活性化をしているような方々と関わっています。流しそうめんのイベントをしたり、ゆず狩りをしたり、山奥で宿を経営する人を訪ねたり。この学校を選んだのは近かったからで、同好会に入っただけで、でも、地元のために活動する人たちを見て、すごいなぁと思うようになって。だから自分も高校3年間でこれという道を見つけて、地域のために活動に挑戦していきたいと思っています。
(普通科1年生・照原悠盛さん)

思います。仕事を創り出そうとする生徒まで現れるようになったのは嬉しかったです」(丸山先生)

普通科においても、探究活動やインターンシップを通して、生徒の進路に対する考えが深まりつつある。

「那賀町はゆずの生産でも有名なのですが、収穫しきれず放置されるゆずも多く、土の劣化や、獣が集まる問題も招いています。そうした地場産業の実情を知った生徒たちは、地域資源活用を本気で考えるようになり、化学の授業でゆずから精油や染料を抽出する実験をしたときも、熱心に取り組みました。『サイエンスの力を、専門の研究所や大学の研究室などで働かなくても、地方でより自由な形で使えるようにしたい』という思いをもって、進学

した生徒もいます」(繁田先生)

**生徒目線で活動内容を考え
生徒以上に現場を楽しみたい**

生徒がやらされ感を抱かないよう、意識していることはあるだろうか。

丸山先生は事前のリサーチと打ち合わせを重視しているという。

「生徒はどんなことを知りたいか先に聞いておいて、協力していただく方を選び、打ち合わせをするんです。その必要性に気づいたのは、企業の方から『高校生は何を聞きたいんですか?』と問われてからでした。なるほどと思いましたね。私は『学校の立場』から活動を計画しようとしていたが、『生徒の立場』から考えるべきだったんだと。今は自分が生徒になったつもりで外部の人と話し合

っています。そうすると、活動当日も『会社は創業何年?』といった一般的な話ではなく、生徒が知っていたことをどんどん語ってもらえるんです」

繁田先生は、生徒たちと地域に向向いたときに「自分が一番楽しそうにする」ことを大事にしている。

「本校には、学ぶことや人と関わることに自信をもてずにいる生徒もいます。そうした生徒が自分の成長を感じられるように『何かに取り組んで心が動いたらその感情を出していこう』とも伝えていくんです。だから私も、実は初対面が苦手なんです。地域との関わりを楽しもうと、『君たちより先生のほうが楽しんでいるから。それだけしか楽しめないの?』。そういう空気を、醸し出していかれたと思っています」